# 問題提起にこたえる

本紙は去月1日発行の第899号で、三池主婦会三川支部の新聞の主婦会三川から、一心が重くなるばかり一の見出しをつけて、新港社宅の大久保信さんの一文を紹介した。同稿は去る7－8月にかけて実施した夏季児童対策に対する、主婦会員としての厳しい内容の反省だったが、大きな反響を呼び起こした。主婦会三川や、うすい、きかんしやなどへの投稿となってつづいた。

ここにそれらの中の一つ一己が実態を知って展望を切り拓こう一（筆者はしただ生とあって、港務指導部一分会新聞のきかんしやに所載）を紹介することにした。

## 己が実態を知って展望を切り拓こう

港務　しただ生

〝みいけ〟九月一日号の「この問題提起にこたえよう」について、私の意のままを書き綴ってみることにしました。

まずこの記事を寄稿された大久保信さんに対し、その勇気と誠意に、絶大の敬意を表するものです。なぜなら、誰しも日頃は、口であれやこれやおしゃべりはできても、そのことを記事として文章化することは、簡単なようでなかなか困難なものであることを知っておりますし、それを敢て提起され、仲間に訴えられたことは大変なことだったでしょう。

訴えられた組織の実態についてその一部であるにもせよ、指摘しておられることは間違いのない事実であります。しかもそれを、自からの運動の中から自分の体で、目で受けとめられていることは同感であります。まして組合員、主婦会員の大多数が知っていることであり、感じていることではありますまいか。

それを敢えて取りまとめ、きれいごとや強がりなどをいわず、本当にそのままに訴えられたことは、何はともあれ組織を思う一念拓きながら、進みたいものです。

のあまり、傾注された情熱の発路ではなかろうか。これこそ本当の意味の三池主婦会員ではないかと思います。もちろん私たち仲間にもいえることだと思います。

この実態をみんなが知っているとすれば、私たちがこの状態になった原因は何か、真の犯人は何であるかを見きわめ、悲観することなく、苦悩は苦悩としてさけて通ることなく、みんなで集まり、助け合い、話し合いの中から進路を導的な人たちだけでなく、みんなの心の連帯、運動の波の中から生まれ出てくるものではないでしょうか。

私たちはいまもう一度意を新たにして、実態の上に立って、先ず個々の運動より、話し合いの中から、展望を拓こうではありませんか。さもなくば、同志でありながら〝ゲバ〟的衝動に走る可能性もなきにしもあらずの候を憂うるものなればなり。

唄いましょう、もう一度。

ホッパー決戦当時の労働歌を、声高らかに大空に向かって。

きっと、そこからもここからも合唱の声が、集まってくることでしょう。

いまは大人に成長した子どもも、余儀なく組織を去ったあの人たちも、合唱しながらやってくることを信じます。そして、そこから展望を！

現在の社会情勢からしてその道は決して安易な道ではなく、困難な遠い、いばらの道だと思います。

ハラにもない高笑いをしたり、意味もない強がりをいっても、いちまつの感情を振り上げても、それは所詮時間の問題で、遠からず消滅するでしょう。そして落伍して、二度と立ち上がって、真実を求めて進む大衆の隊列に参加することは不可能となりかねません。

その仕事は決して、執行部や指導的な人たちだけでなく、みんな

## 三池に今もタコ部屋が……

### 「快適な職場造り」とは何ごとだ

一日から〝全国労働衛生週間〟運動が、全国の職場で実施されたが、会社はそのため九月から準備にはいったとして、社内報〝くろだいや〟などを通じては「快適な職場作りを」と呼びかけた。

では果たして、今日の職場の実態はどうか。職場新聞の記事から拾ってみよう。

〝やまなり〟（三川）

九月十四日の釜井さんの死亡災害後も、重要災害が起きている。十七日には、カッターでマイトをひっかけて爆発。

二十一日には本層三六乙方で、作業台が落ちて負傷者四名。うち入院三名を出した。

台の上には、不良鉄柱が六～七本ものせてあった。現場は無法地帯といっても過言ではない。

保安要求を出すと、出炭に追われている係員は良い顔をしない。新労の仲間は、「ひと口いえば百円へる」と言っている。笑えない現実である。

〝地底〟（宮浦）

退職者が後を断たず、ヤマはますます人手不足で、環境は悪くなる一方。

近ごろ会社は、長崎県の大島炭鉱から採用した人を、二戸を一戸に改造した宮前社宅に入居させている。その人たちのツブヤキ。

「会社は、三池では十万～十五万の給料がとれる。ほとんどがカラーテレビをもっているとウソをいった。そのためあっちから、わざわざカラーテレビを買って持って来たのに」

「三池の切羽は熱くて、水をかぶったように汗ビッショリになる。日本一近代化されたはずの三池の保安は、危険がいっぱい。大島の方がうんとよかった。これでは満勤できん。それに大島では、遠慮なしになんでん言えよった。ここは思うごついえもせんが、また言うたっちゃ同じ」

〝もぐら〟（三川）

八月下旬、三川鉱〇〇組組夫。六月に、いままで一緒に働き、家も近くであった兄さんが組夫をやめて、三池を去ってゆかれた。

この若い人も将来を考え、去ることを決意しました。そこで退職届を出し、いくらかあった肩入金（借金）もきれいに返済を終り、家財道具も運送会社に頼んで、約二万円の費用をかけ荷造り。引っ越すだけとなっていました。

そこで組の親方に呼びつけられ退職させないと暴力を振るわれ、まとめてあった荷造りを解き、現在も出勤されています。

組夫の人たちは、簡単に退めることもできず、現代版〝タコ部屋〟といった状態です。

× ×

何が「快適な職場づくり」かといいたいところである。

鉄面皮なくろだいやの一面

思わず手が鳴り、よろこびが湧く。

## 「来年も元気で……また会いましょう」

主婦会本部　田中静江

この十三日、三池主婦会主催の敬老会が玉名温泉で開催された。すでに九回目のこの催しも、主婦会活動の中でいよいよ欠くことのできない行事となってきた。歌、おどり、奇術と、各支部「今日の日のために」と心をこめて練習を積みあげただけものに、湯につかることも忘れて興ずる年寄りたちだった。

一度の主婦会の統一行事も、早や九回目。はじめのときから一度も欠がさずこられるという老人の方を、こくたたくと、笑み返す忘れられないその顔。「息子のおかげですたい」と、喜ばれる気持に、日ごろの苦労もふきとばされたよう。

やがて、各支部からつぎつぎに出される踊り、そのあざやかな手さばきに、おじいちゃんやおばあちゃんたちがじっと見とれる。楽しいかくし芸も、三池主婦会あってのこそと思う。

いま政府が進める石炭政策の中で、労働者はますます労働強化に追いこまれ、ますます苦しい闘いをせねばならない。まして三池では、二度にわたった災害の犠牲者、CO患者を抱えて闘っている。そんな闘いを進められるのも年寄りのかげの力があったのだ、とつくづく思う。

その日敬老会が終って、別れて帰るとき、「おじいさん、おばあさんいつまでも元気でね。また来年もきっと会おうね。それまで病気しないようにして、丈夫でいてね」と声をかける。皆さんはふり向いて「また会おうばな」をくり返す。「よかったな、こんなに喜んでもらって」こんな言葉が、ふと口に出る。各分会長さんのご協力に深く感謝しつつ、一日をふり返った。

×

なお、こんどの敬老会への参加者は百六十八名にものぼった。

写真上から「沖縄の踊り」「日本舞踊」「奇術」「炭鉱ぶし」などにぎやかだつた、その日の舞台。

## 受彰の長寿者お二人

三池主婦会は敬老会を開催するに際して、格別長寿を恵まれている三人（おじいさんとおばあさん）の人を表彰、心ばかりの記念品を贈って祝福した。

二人の人というのは平島もとさん（85才、宮浦指導部＝宮前社宅）と猿渡惣平さん（84才、三川指導部＝荒尾市大島）で、二人の人が久保会長から記念品を贈られるときは、会場の大広間から割れんばかりの拍手が湧きあがった。

「これからますますお体に気をつけていただいて、百才以上にも長生きしてもらうように」と、心から祈ってやまない。